

林城屋敷城跡(林三城とは内林館(本城), 城山城, 北浦城)(別名林城山城)

(津市芸濃町中縄)(関翁寺南方)

林城については、江戸時代前期の地誌『勢陽雜記』に「天正十二年（一五八四）頃より織田上野介信兼息民部少輔、領知一万石にて此所に主たり」とあり、十六世紀末には織田信長の弟信包（兼）の長男信重が林周辺を領していたといえます。また、『寛政重修諸家譜』でも「信重 豊臣太閤につかへ一万石の地を領し、のち東照宮につかへたてまつる」と記され、この一万石（『断家譜』では「仕豊臣秀吉公、勢州林城賜三万石」とし、ほかに「文禄三年 一万六千石」という記述もある）が林周辺というわけです。そして、関ヶ原の戦いでは東軍に属し、家康からも本領安堵を受けたようですが、元和元年（一六一五）に父信包の遺領を弟信則が継承したことに不満を持ったことから所領を没収され、流浪の身となってしまいました。これが林城の最後です。

信重が林城主のときの治績については、あまりわかりませんが、『三重県の地名』（平凡社 昭和五十八年）の「奥之井」項には一身田（現津市）下津家文書の「奥之井溝替ニ付口上書并村方旧記」が引用され、「林升」が存在したことや文禄五年（一五九六）には城主信重が乗り出し用水の調停を行っていることなどが記載されています。また、慶長十一年（一六〇六）には、織田民部の署名で伝馬駄賃の「定」を加太村（現関町）に出しています（『三国地誌』所収）。これは、現在確認できる林城主信重の唯一の文書ですが、信重は林城を居城とし、周辺部かなり広い範囲を領有していたと考えられます。

このように、信重のときは少しでも手掛かりとなる史料が見られます。しかし、信重以前については全く文書等の史料が確認できません。参考として後世の編纂物の記述をここに掲げますが、根拠がはっきりせず、そのままというわけにはいきません。江戸時代後期の『勢陽五鈴遺響』では、「林城——明応年中（一四九二～一五〇一）長野工藤氏ノ一族林中守祐行住ス」とし、天正二年に滝川一益や雲林院出羽守などの攻撃、同十一年に豊臣秀吉らの攻撃があつて、林氏は秀吉の幕下となり、但馬で小禄を受け、その後、信重が林城に入ったというものです。また、明治二十二年（一八八九）の『伊勢名勝誌』では「天文七年（一五三八）関氏ノ族鹿伏兎定長ノ二子定保城ヲ築キ之ニ居ル林氏ヲ冒ス」という説をあげ、但馬に封されたのも定保の子保春としています。そのほかにも、いくつかの説があり、違った記述もあります。

次に、城跡についても、なかなか確定できません。昭和五十二年の『三重の中世城館』・昭和五十五年の『日本城郭大系 10』・昭和六十一年の『芸濃町史』には、それぞれ見解に差があります。『中世城館』では「林殿町城」と「林城山城」をあげ、前者は祐行が築き、後者は定保が築いたものとしています。しかし、『城郭大系』は「林城屋敷城」のみをあげ、先の「林城山城」の場所は「しろやま」と呼ばず、全く城と関係ないと指摘しています。さらに、『芸濃町史』では、『伊勢名勝誌』の「林城址林村ニ二処アリ」の記述に従い、祐行がいたという「林北浦城」と、のちに定保が築いたという「林城屋敷城」の二ヶ所を掲げています。二ヶ所とも土塁等の遺構はないようですが、「林北浦城」は地元で「城（じょう）」と呼んでいる丘陵を推定しています。

いずれにしても、わからないことが多く、城主に関わる史料の発見や城跡についての調査などが進むことが期待されるところです。

「三重の文化」による

【感想】 津市芸濃町林にある屋敷跡の南の立派な石垣の住宅が取り壊され、たまたま行けた。林氏子孫の住宅と思われる。

擬宝珠の石塔から北に行くと、屋敷跡であつたらしく崩れかけた土塀が見られ、竹林の西側に堀・土塁が残っている。

【案内】 県道648号線の交差点横の空き地に駐車できる〔マップコード 213 261 851*45〕。

そこから東に行くと、長屋門（林氏）があり、消火栓ボックスとの間から北に竹林が見える。

【歴史】 明応年間（1492～1501年）長野工藤氏の一族・林裕行が居城としていたという。

天文五年（1536年）城主・林重越の時、亀山の関氏に攻められ落城、関氏の一族が入り、林姓を継いだ。

天正三年（1575年）林城が滝川一益に攻められ落城、城主・林日向守は閑翁寺にて自刃した。

「古城盛衰記」による

歴史 勢陽五鈴遺響によると、明応年中（1492～1501）に長野工藤氏一族の林中守祐行が住まうとある。

天文5年（1536）に長野氏と対立していた関氏に攻められ、関氏の一族鹿伏兎定長の子定保が城主として入り林氏を名乗ったともいわれている。この時、林重越は追われた。

天文7年（1538）定保は城を築く。

天正2年（1574）に、滝川一益と信長の幕下になっていた雲林院出羽守に攻められた。西方の楠原・北方の楠平尾の武将もこの城に籠って守り抜いた。和議が成立する。

北側の閑翁寺の言い伝えでは、天正2年滝川一益の兵火に城主林日向守は翌年、当山にて切腹、寺院も全焼した、とある。

天正11年（1583）羽柴秀吉に攻められたが落ちなかった。のちに秀吉側についた。

天正12年（1584）信包は林の領主となる。また、早々に嫡男・信重が家督を継ぐ。

慶長5年（1600）の関ヶ原の戦いに東軍として参戦し、所領1万石で林藩を立藩する。

元和元年（1615）信包が死去すると信包の家督を弟の信則が継ぐことになり、信重は幕府に申し立てをする。願わず、信重は所領を没収され流浪の身となり、林城は廃城となる。信重、30年ほどの働きが無となった。

一族 長野氏の一族

感想

林三城は史料がほとんどない状態という。勢陽五鈴遺響、伊勢名勝志、勢陽雑記それぞれが異なった部分を記述している。また、中世城館、日本城郭大系、芸濃町史も異なった解釈をしている。疑念×疑念＝収集がつかない状態、となっている。

林三城の内林館が本城であろう。城山城と北浦城は林信重の時にかなり広い範囲を領有していた関係から、出城的機能を持たせた簡易的なものであったと考える。

父、信包から領地を引き継いだ後かなり領有地の運営に活躍した様子が少ない文書から垣間見えてくる。あるいは、用水の調停など領地内のもめごとの見張用に築かれたものかもしれない。城としての施設が見られないのもその辺の理由からきているのかもしれない。

別名 林城山城

住所 津市芸濃町中縄

「山城遺産」による



林城屋敷城遠景(北西から)



「閑翁寺」にある、林日向守之墓